2013 年 6 月 13 日・週刊きたかみ「文芸」欄では

『畠山義郎全詩集』刊行――宮沢賢治の理想を追い求めて

詩人・エッセイスト・町長として理想を現実化

70 年を超える創作活動の軌跡（詩歌文学館振興会評議員）

北秋田市在住で、長年合川町長を務めた、詩人・エッセイストの畠山義郎氏が「全詩集」（コールサック社）を刊行した。今年 90 歳。終戦後の 1946 年刊行の第一詩集から 2009 年の第十詩集まで、重複を除いた 302 篇と詩誌、未収録詩などを収録。さらに詩人論や詩論、校歌等の作詞、評論まで網羅した。

自身による年譜の末尾を見る。

―終戦前「日本詩壇」「新詩論」に、戦後「詩学」、そして最近は「詩と思想」に作品を発表。

現在、日本現代詩人会会員、日本詩歌文学館振興会評議員、秋田県現代詩人協会会員（初代会長）。「北東北子どもの詩大賞」委員会顧問（創設者）。藍綬褒章、勲三等瑞宝章、秋田県文化功労者、合川町名誉町民など―。

敗戦、復員、農地改革、青年運動を行い、後に 26 歳で村長に当選。以後、「詩人村長」として知られる。

コールサック社の発行人でもある鈴木比佐雄氏の解説では、畠山氏の「織り成す優れた一篇の長編叙事詩」を感じさせ、「民衆が幸福になるようにとの宮沢賢治の理想を追い求めて現実化する試みだった」と、その足跡を表している。

作品に関しては、山形の詩人・真壁仁氏が的確に論評。畠山氏の第六詩集「日没、蹄が燃える」で「心根はやさしいが、したたかな風雪をくぐった男の、黙ってしまう代わりに吐いたことばだ。ことばのブナ林だ」と記した序文で理解される。09 年刊行の「無限のひとり旅」では、「スケールが大きく人間と宇宙の関係を気高く詠いあげた詩は数多くないだろう」と賞賛する鈴木氏。

全詩集刊行にあたり、氏の詩作品や詩運動に共感した秋田県及び全国各地の 79 人が「よびかけ人」になった。

「詩篇に宿る東北・秋田の豊かな精神風土の魅力を感じていただければ幸い」と編集委員一同として記している。

と紹介されています。